

人体科学会 第32回 年次大会

2022年12月4日（オンライン）

論証知と直観知の統合

—新しい「知」の在り方を求めて—

棚次正和

（京都府立医科大学・名誉教授）

1 二種類の知の存在～論証知と直観知

- 論証知(discursive knowledge) : 感覚的経験とそれに基づく合理的判断や推論を通して獲得する知。

言語媒介的な考える知。

知る主体は、人格的自我。(人格 ← 仮面 persona)

- 直観知(intuitive knowledge) : 感覚的経験を経ずに対象の本質を直接的に覚知する知。

言語無媒介的な考えない知。

知る主体は、無我(≡真我)。 (× 身体知)

※ 無我とは、ここでは「自我が無いこと」を意味する。

仏教でいう「無我(nirātma, anattā)」は、本来は真我に非ずという「非我」の意味であり、真我の否定ではなかった。

古来、哲学的思索や宗教的修道の深化の過程で、この二種類の知の存在意義とそれらの調和が重視されてきた。

- ◆ 古代ギリシア哲学—アイデアを直覚する**ノエーシス**(noēsis、プラトン)、本質を観照する**テオーリア**(theōria、アリストテレス)は、論理的推論による**間接的認識**(dianoia)よりも上位に置かれていた。また、アリストテレスは、必然的な**学知**(epistēmē)に、始源(archē)に関わる**直覚**(nous)が統合された**叡智**(sophia)を、より一層優れた知と見ていた。

noēsis, theōria > dianoia epistēmē + nous = sophia

- ◆ 近代西洋哲学—最も自明で確実な**自己直観**(cogito) [デカルト]、一切を**永遠の相の下に見る****知的直観** [スピノザ]。その後登場したカントは、時間・空間の先験的形式の内に**感性的直観**を限定し、感性和悟性の総合を認識・判断と見なしたが、フヒテやシェリングは、再び知的直観を回復させる方向に思索を展開した。

- ◆ ベルクソン—行動の観点から物事相互の関係性を捉える知性(intelligence)と、物事の本質を一挙に認識する直観(intuition)の違いに着目して、哲学的方法としての直観を論究した。

- ◆ 古代インドの宗教—事物を差別の相において認識する分別知(vikalpa-jñāna)と、主客の対立を超えて直覚する無分別知(nirvikalpa-jñāna = 般若 prajñā)が峻別されていた。



※ 瞑想の深化(主客合一) dhāraṇa(凝念) → dhyāna(静慮) → samādhi(三昧)

- ◆ キリスト教の祈禱・黙想—主題化や対象化を伴う瞑想(meditation)と、対象と一つになる主客合一の観想(contemplation)が区別されていた。



ところが、真理の基準が神よりの「恩寵の光」から、「自然の光」(人間の知性)へと置き換わったルネッサンス期以降、とりわけ17世紀西欧の科学革命以降、次第に論証知が優位を占めるに至り、直観知は劣化の一途を辿った。

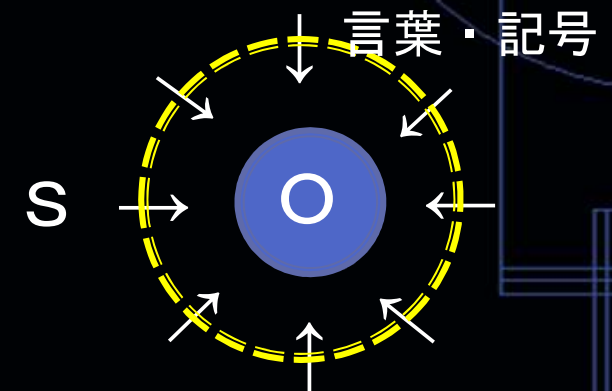
二種類の知の違い

- 論証知（＝言語媒介的な考える知）

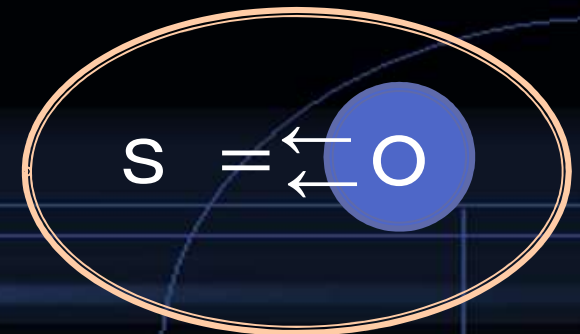
対象を外から視角に応じて徐々に部分的に捉え、その構造や機能や特性、あるいは部分相互の関係性を言葉や記号で分析することで得られる。

- 直観知（＝言語無媒介的な考えない知）

対象の本質を内から一挙に全体的に直接把握する。



【主観・言葉・対象の三項関係】



【楕円の二つの焦点のような二項関係】

知の分類—学問体系①～アリストテレスの場合

理論学

- 第一哲学（形而上学）：存在を存在として研究
- 数学：存在を数・点・線・面から研究
- 自然学：自然的存在としての存在を研究

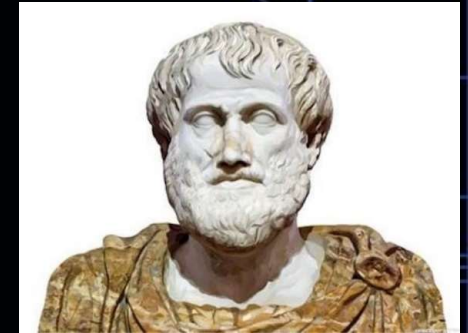
[対象は必然的であるから、厳密な論証が求められる]

実践学

- 倫理学：市民としての善良な性格養成に関わる
- 政治学：ポリスの制度・立法・行政などを扱う

[厳密性の度合いの低い蓋然性に止まる]

制作的な技術



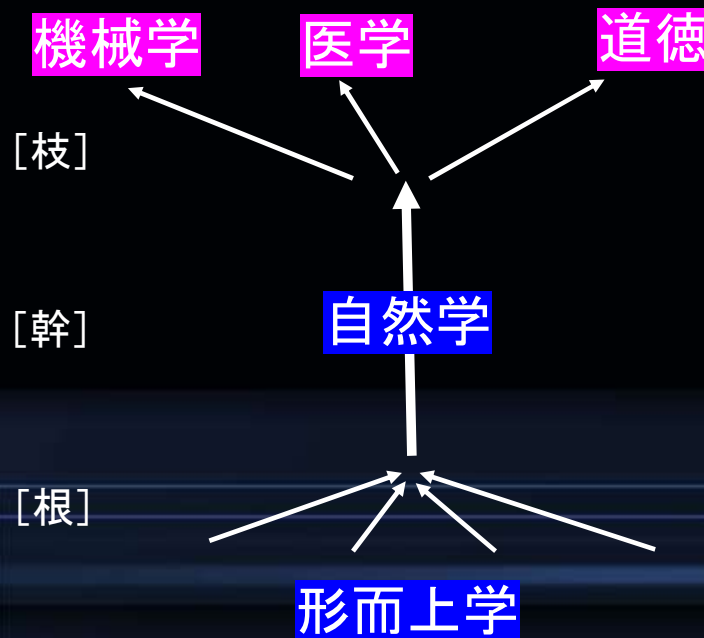
(前384-前322)

知の分類—学問体系②～デカルトの場合

- 学問全体を一本の樹に譬える。根は形而上学、幹は自然学、その幹から出ている主要な三つの枝は、医学(生物学・心理学を含む)、機械学、道徳に帰着する。



(1596-1650)



【精神】

【延長】

「私の存在」 ⇒
(明晰判明な認識が真である)

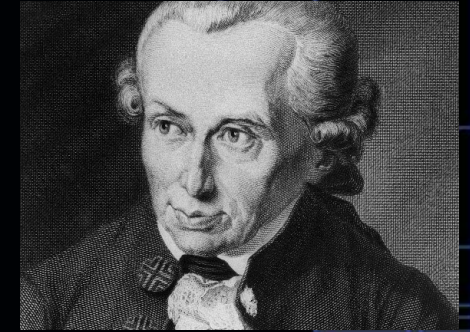
物体的事物

形而上学 ⇒ 自然学

⇒ 医学・機械学・道徳

知の分類—学問体系③～カントの場合

- あらゆる理性的認識を、特定の対象とそれを支配する法則を扱う「**実質的哲学**」と、悟性や理性の形式や思考一般の普遍的規則を扱う「**形式的哲学**」に二分する。



(1724-1804)

- 実質的哲学**
 - = 経験的哲学
 - 倫理学** = 実践的人間学 自由の法則 【精神】
 - 自然学** = 自然哲学 必然の法則 【自然】
- 形式的哲学**
 - = 純粹哲学
 - 論理学** 思考の形式や普遍的規則を扱う 【論理】
 - 形而上学** 悟性の一定の対象を扱う 【人倫と自然】

現代における学問の分類

- 日本十進分類法(日本図書館協会[JLA]による増補改定)

0 総記、1 哲学、2 歴史、3 社会科学、4 自然科学、5 技術・工学、6 産業、7 芸術・美術、8 言語、9 文学 [学問領域を10に区分]

- 国際十進分類法(デューイ十進分類法に基づく)

0 Generalities, 1 Philosophy. Psychology, 2 Religion. Theology, 3 Social Sciences, 4 Vacant, 5 Natural Sciences, 6 Technology, 7 The Arts, 8 Language. Linguistics. Literature, 9 Geography. Biography. History

文部科学省による学問領域の区分—系・分野・分科

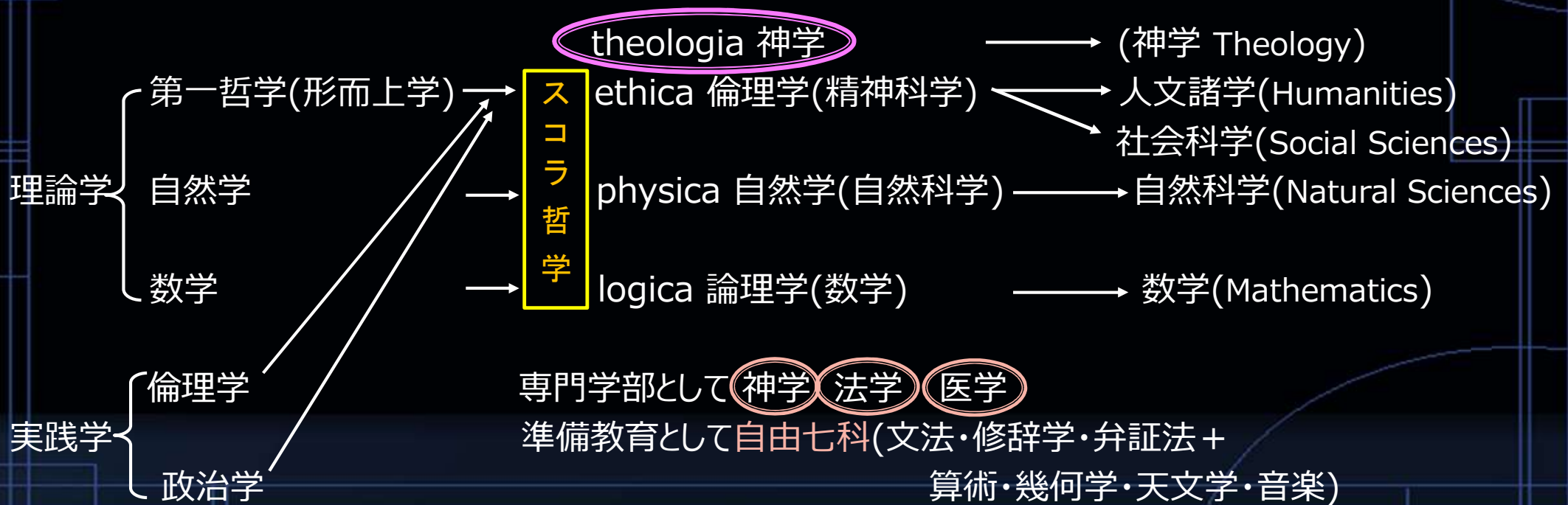
- ◆ **総合・新領域系**
 - 総合領域（情報学、神経科学、実験動物学、人間医工学、健康スポーツ医学、生活科学、地理学など）
 - 複合・新領域（環境学、ナノ・マイクロ科学、社会・安全システム科学、ゲノム科学、生物分子科学、地域研究など）
- ◆ **人文社会系**
 - 人文学（哲学、芸術学、文学、言語学、史学、人文地理学、文化人類学）
 - 社会科学（法学、政治学、経済学、経営学、社会学、心理学、教育学）
- ◆ **理工系**
 - 数物系科学（数学、天文学、物理学、地球惑星科学、プラズマ科学）
 - 化学（基礎化学、複合化学、材料化学）
 - 工学（応用物理学・工学基礎、機械工学、電気電子工学、土木工学、建築学など）
- ◆ **生物系**
 - 生物学（基礎生物学、生物科学、人類学）
 - 農学（農学、農芸化学、森林学、水産学、農業工学、畜産学・獣医学など）
 - 医歯薬学（薬学、基礎医学、社会医学、内科系臨床医学、外科系臨床医学、歯学、看護学）

学問分類の変遷～西洋の場合

◆古代ギリシア(アリストテレス)

◆中世西欧(キリスト教世界)

◆近現代



知—「しる」と「わかる」、sapientia(智慧)と scientia(知識)

■ しる(領る・知る) ← しり(領り・知り)

「《物の状態や性質を、すみずみまで自分の思うままにする意。占有・統治・支配・世話の意味から転じて、**意識**の中ですみずみまで認識し自由にする意》①占有する。②土地を領有する。③統治する。支配する。④(妻・愛人として)世話する。めんどうをる。⑤認識する。理解する。…」

※ ひじり(霊知り=聖)、ものしり(物知り)。知る主体と知られる対象が一心同体、主客合一。

■ わかる[四自] ← わく[四] ← わき(分き・別き)

「《ワケ(別)の古形。**相違を見て明確に区別する意**》①はっきり区別する。②けじめをつけて考える。わかまえる。」

わける[下一他] ← わく[下二] ← わけ(分け・別け)

「《**一体であるものに筋目を入れて二つまたはそれ以上に離す意**》①分割する。分配する。②仕切りをつける。③分け持つ。手分けする。④すき間をつくる。間をあけて道をつくる。⑤論争をさばき、決着をつける。」

(大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波 古語辞典』、岩波書店、1974年)

science ← scientia (scire 知る + -entia -ENCE = 知ること、scindere 分ける)

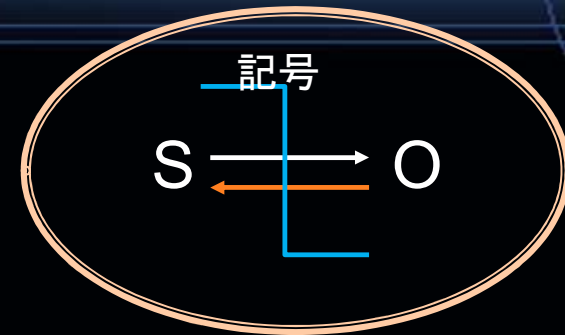


知識、科学：部分の分析知

sapientia(智慧：全体知)

2 二種類の知を統合すること

■ 知をめぐる基礎的な認識枠組み



$S \neq O$

$S = O$

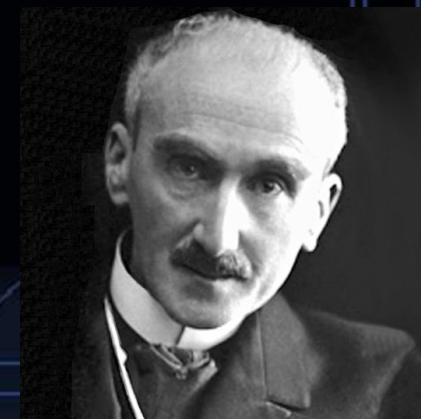
①「誰が」 ②「何を」 ③「如何にして」 ④「何によって」 知るか？
(知の主体) (知の対象) (知の方法) (知の様態・要素)

- ① 自我(思考・感情・意志)、or 無我(≡真我 = 叡智・情緒・聖意志)
- ② 精神(意識)現象、or 自然(物質)現象、or 論理の世界
- ③ 内観(内から観る、主客合一)、or 外観(外から見る、主客分立、観察と実験)
- ④ 直観、イメージ・象徴、概念、or 知的合一、情的感応、意的共鳴

直観の具体例～ベルクソンの場合

- 直観は何よりもまず内面的持続に向かい、「併置ならざる継起を、内面的成長を、未来を蚕食する現在内への過去の不断の伸長を把握する。」直観は、空間や言語のプリズムを介さない「精神による精神の直接的ヴィジョン(*la vision directe de l'esprit par l'esprit*)」である。換言すれば、直観は、「直接的意識であり、見られる対象と分かちがたいヴィジョンであり、持続であり合一でさえある認識」である。
- 直観の対象は、特定領域に限定されずに、「無意識の辺縁に迫る拡大された意識」に対しても、また個人意識を超えて「意識一般」や「生命的なるもの」や「無機物」に対しても及ぶものと想定される。直観は、物質的事物の場合でさえ、それらが精神性を分有する点を把握しようとするのである。
- 「直観的に考えるとは、持続において考えることである。(penser intuitivement est penser en durée.)」言い換えれば、直観は運動から出発し、運動を实在そのものとして認知する。不動性とは、精神が動きに対して撮ったスナップ写真にすぎない。「直観は持続すなわち生長に注目しているのであって、そこに予見不可能な新しいものの不断の連続性を観取する。直観は、自身の有するより以上のものを自身から引き出すこと、・・・また、实在には精神が染み込んでいて創造であること」を知っている。

(『ベルグソン全集7 思想と動くもの』、矢内原伊作訳、白水社、1971[1965]年)



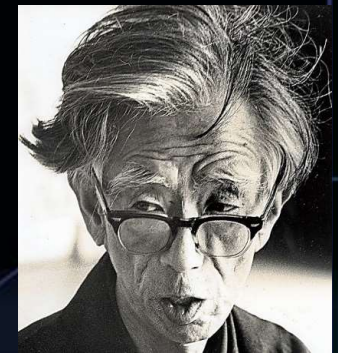
(1859-1941)

直観から概念へ、形而上学と実証科学～ベルクソンの見解

- 直観は苦しいもので、長続きはしない。思惟はいつも言語を利用するものだが、「直観も思惟と同様に、最後には諸概念(des concepts)の中に宿ることになる」。
- 「かようなわけで、私は形而上学(métaphysique)に一つの限定された対象すなわち精神を指定し、一つの特殊な方法すなわち何よりも直観を指定する。これによって私は形而上学を科学から明確に区別するが、これによってまた、私は両者に等しい価値を帰するのである。私は、両者はいずれも実在の根底に触れうるものと信じている。」
- 実証科学(science positives)は感覚による観察に訴え、そこで得られた素材の仕上げを抽象し一般化する能力に、判断と推論に、要するに知性(intelligence)に委ねる。それが得意とするのは、惰性的物質の領域であり、生命現象を扱う際でも物理化学的なものに専念するのが常である。しかし、その対象が精神となる時、実証科学の困惑は途方もなく大きなものとなる。そこで、知性は仕方なく、精神的なものを物質的なものに置換せざるをえなかったかのように理解しようとする。知性の役割は「道具を製作することであり、また周囲の諸物体に対する行動を導くこと」にある。この知性の働きを、科学は遠くにまで押し進めたが、その方向は変えなかった。
- 科学に対して、形而上学は、精神を自らの側に保留し、外界認識において前進するよりも遥かに困難な自己認識において前進することを課題とするのであるが、そのためには自然的傾向に逆らって、精神をそれが弛緩する空間、つまり物質性から解放せねばならない。しかし、直観は自らを伝達するためには観念に跨がらねばならず、様々なイメージに取り巻かれた諸観念(des idées)に訴えることになる。

直観の具体例～岡潔の場合

- 私の数学上の発見について「特徴を数え上げると、考えてもいないのに、とっさにすべてわかること。疑いがのこらないこと。および鋭い喜びがながく尾を引くことの三つである。」(p.137)「これは仏教で**無差別智**と呼んでいるもの。無差別智とは不識的に知、情、意に働いて、働きとなって現われる智力である。」(p.138) 働き方によって四種類に区別され、数学上の発見は主として平等性智が働く。
- 小我と真我があり、「**真我**は縦に(時間的に)生き通しである。横に空間的に際涯がない。」(p.145)真我は非自非他である。**真我の心は同体大悲**である。(人の心の悲しみを自分の心の痛みとして感じる)
- 「仏教は小我は無明(自己中心の本能)の描く迷いであるから、これを離れて真我に帰れと教えているのである。私の体験によると**無差別智は真我に働く**のである。」(p.146)
- 「デカルトの、我思う故にわれあり、というわれは小我ではない・・・」 童心にも小我は無い。
- 生まれて三年は童心の季節。それに続く第一年には時空が少し分かり、理性が少しできる。第二年には自他の別がわかる。真如(超自然界)→世界(自然界)→衆生(社会)。
- 「**分別智の道は執であり、無差別智の道は捨である。・・・(問題の解決法)・・・**大脳前頭葉を主人公と思うのをやめて、道具と思えばよいのである。」(p.149)
- 「世間智は初めから捨てよ。**分別智は使って使って使い抜けば、おのずから無差別智にいたる**ということになる。」(p.150)



(1901-1978)

(岡潔『一葉舟』、角川文庫、1971年)

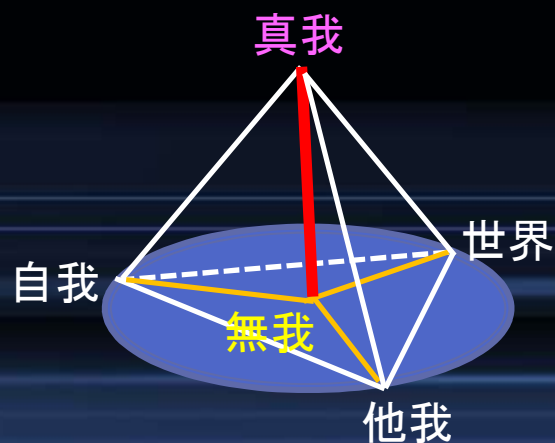
唯識でいう「転識得智」(煩悩の汚れなき清らかな智慧 = 四智)

- **阿頼耶識** → **大円鏡智**(諸法の実相を鏡の如く映し出す智)
[無意識]
- **末那識** → **平等性智**(諸法の平等を觀ずる智。自他、彼此の差別なし)
[自我意識]
- **意識** → **妙觀察智**(障りなく妙に諸法の相を觀察する智)
[精神活動]
- **前五識** → **成所作智**(煩悩が消えて神通が成就する智)
[感覺的知覚、眼耳鼻舌身]

- 一個の人間において、二種類の知は、どのように統合されるのか？
- 二種類の知の統合とは、二種類の知が成立する意識場が統合されるということ。
- 論証知に関わる自我と、直観知が生じる無我(≡真我)の統合は、如何にして可能か？

一般に、存在の根源にあるものの方が、そこから派生したものよりも高次元に属し、存在論的には先行する。自我とは、無我から派生した仮象として存続するものと言える。

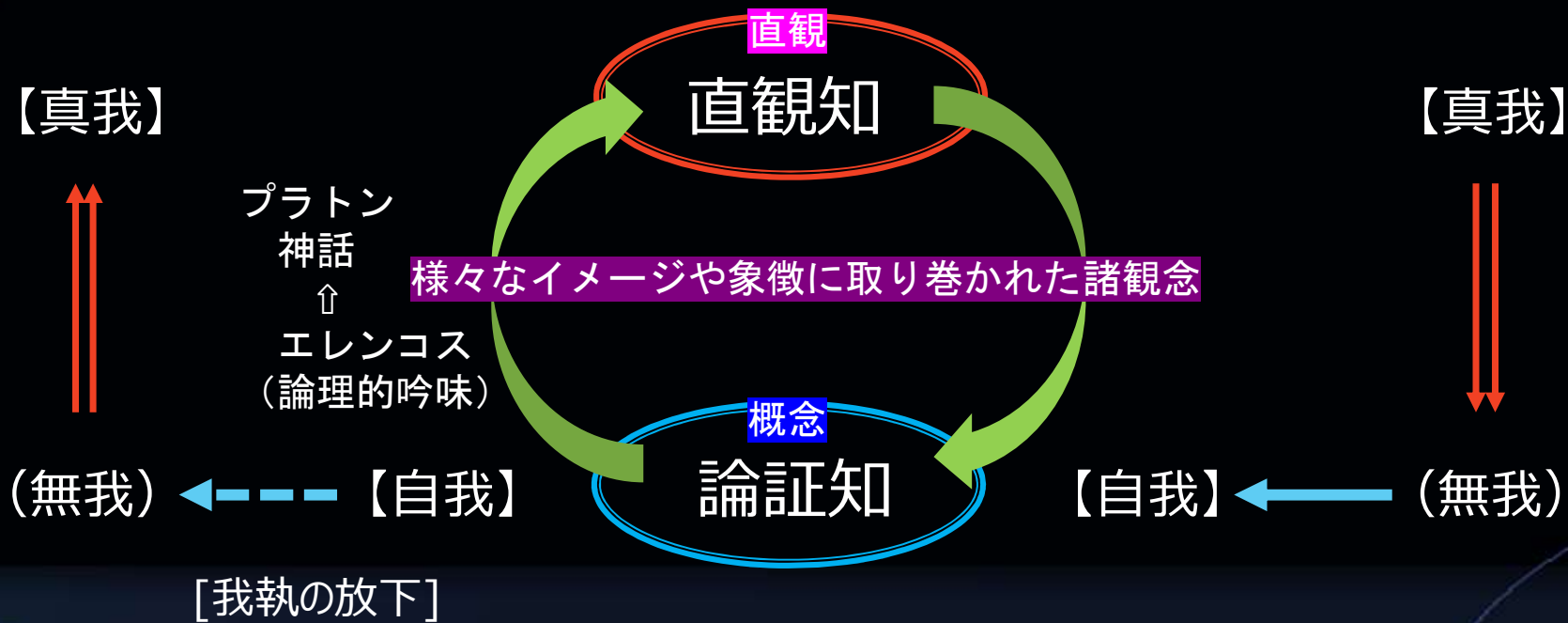
自我と無我の関係は、自我の我執が解消されると無我となり、(無我の深まりに応じて、真我が開かれ)、その無我から感覚的世界に降りて、そこに向き合った意識が自我であると了解できる。自我と無我(≡真我)とでは、意識が働く次元・位相が異なるのである。



**真我：自我＝実在：仮象(現象)
(役者と役柄)**

※ 真我と自我の統合は、役者がドラマの役柄に没入せず、役柄を客観視する事態に似ているのではないか。真我と自我の二つの意識場の落差を実体験し実感することを反復することが統合に繋がると想定される。

直観知と論証知の動的交流・循環



※ 論証を極限まで徹底 ⇨ 論証の捨離

※ 直観を言語化する過程

明証性(evidence)の違い

- 論証知—**検証、実証(verification)**

その知に関する証明が、再現性(reproducibility)や反証可能性(falsifiability)に基づいて、万人が検証可能な方法で外(調査や事実)に求められる。

※論理主義・実証主義の弊害

- 直観知—**自証、内証(self-evidence)**

それ自身の内に確実性・明証性の保証原理を持っているため、改めて保証原理を外に求める必要はない。

※勘違い、第二直観の可能性

3 直観知を回復する様々な訓練法

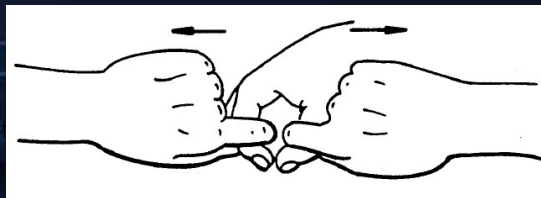
- O-リングテスト (Bi-Digital O-Ring Test, BDORT)

「筋の緊張（トーンズ）を利用して生体情報を関知する検査技法」であり、ニューヨーク在住の医師・大村恵昭博士が1977年頃に考案し、1981年に最初の論文が発表された。「生体そのものが極めて敏感なセンサーで、毒物を近づけたり、体に合わない薬剤を手にもたせたりすると、筋の緊張は低下し、逆に有効な薬剤では緊張が良好に保たれる」という原理に基づいている。



補助的医学診断法として捉えられている。

- ①異常部診断法（病的圧痛部を刺激すると、筋力が低下する。臓器代表点の刺激により判定）
- ②共鳴現象の応用（二つの同一物質間の共鳴現象を利用して、遺伝子、細菌、ウイルス、ホルモン、金属などの存在の有無を判定）
- ③薬剤適合性試験（病患に対する薬剤の適合性の有無や適量を判定）



（日本バイ・デジタルO-リングテスト医学会、HP「BDORT概要」より）

②「①」筋の緊張
で生体情報を感知する

BDORTはニューヨーク在住の日本人医師大村恵昭博士が1977年頃くらいに考案した方法で、最初の論文が発表されたのが1981年である。筋の緊張（トーンズ）を利用して生体情報を感知する。

BDORTの応用的展開と三段階

- BDORTの応用的展開

二人一組が原則 ⇨ 一人O-リングテスト、対象の目視や指差し、イメージ化、メンタルな次元への応用。

- BDORTが含む三段階

- ① 自我中心の態勢を解除して、無我に復帰する。(指の筋力を一定に保つ。)
- ② そこから意識を対象に向ける、あるいは問いを発する。
- ③ 指の筋力で答えを確認する。

直観を磨く（回復する）様々な訓練法

- ペンデュラム(振り子)を利用して判定する。（右回り、左回り。縦揺れ、横揺れ）
- 指と指を擦り合せて、その摩擦力・粘着度の強弱で判定する。（入江式FTなど）
- 呼吸がスムーズか否かで判定する。
- 奥歯の噛み締めが強弱で判定する。
- 直立した姿勢で、前傾するか否かで判定する。

- 時間の確認、電話の相手、曲がり角で最初に出会う人の性別や老若、等々。

※ 無意識によるカルマ的な誤導を避けるためには、**無我に復帰する方法を厳密で適正なものにしておく**ことが不可欠である。

（正答率は、何パーセントか？ 科学的根拠はないが、信憑性はある？）

⇒ **「瞑想や祈り」を日常生活の中に習慣として定着させる**ことが重要である。
自然（山川草木）と触れ合って、生命的共感度を高めること。

参考文献

- 岡潔『一葉舟』、角川文庫、1971年。
- 『ベルグソン全集7 思想と動くもの』、矢内原伊作訳、白水社、1971[1965]年。
- 大村恵昭『図説バイデジタルO-リングテストの実習』、医道の日本社、2004[1986]年。
- 棚次正和「応用キネシオロジーの世界～O-リングテストは疑似科学か」『身心変容技法研究』第2号(科研基盤研究(A)「身心変容技法の比較宗教学」研究代表者：鎌田東二)、37-46頁、2013年。
 - ⇒ 「[宗教と科学の対話研究会](#)」のHPの「論文」欄で閲覧可能。
 - ⇒ 「[宗教と科学の対話研究会](#)」のHPの「講演(PDF版)」で、BDORTに関する講演のスライド(PDF版)を閲覧可能。



ご清聴ありがとうございました